

介護者 孤立させない

老後を支える 米国レポート上

ストレス対策など個別指導

増え続ける高齢者の生活を支えるには――。公的な介護保険制度がない米国の取り組みは、より高齢化が進む日本でも迎える老後のヒントになります。まず、高齢者を介護する家族ら「介護者」を支える仕組みをみました。

米国東部にあるペンシルベニア州ピッツバーグに住むアリン・クラウトンさん(63)は、認知症の母(89)との関係に悩んでいた。

母は自分の記憶障害を認めず、自立した生活を望んだ。だが、料理をする火をつけたままその場を離れ、フライパンをこがした。時間の感覚がなくなり、夜でも早朝でも人に電話をかけてしまう。

「認知症の人は、順序立てて

政府財源で支援策

2016年版の高齢社会白書によると、米国の高齢化率は14.8%で日本の26.7%ほど高くはない。50歳以上を介護する人は3420万人いると推計される。介護者を支援するため、米政府は00年に「全国家介護者支援プログラム」を創設。財源を設けて各州が介護者に休息サービスを提供するよう求めた。各州は地域にある高齢者のための拠点を通じて介護者を支援する。病院や大学も介護者の支援や教育に取り組んでいる。

負担を数値化 ■ サポーター養成

北海道栗山町

介護者に着目した取り組みは日本にもある。北海道栗山町の社会福祉協議会が2014年に始めた「ケアラーアセスメント」は、その一つだ。介護保険には、介護が必要程度(要介護度)を7段階で判定する要介護者向けの「要介護認定」がある。一方、ケアラーアセスメントは高齢者や障害者を介護する側を対象に負担感や心身状態を5段階で評価している。

「在宅サポーター」と呼ばれる職員が介護者の自宅を定期的に訪問。介護者の負担を数値化して保健師や地域包括支援センターとも共有し、程度に応じた支援につなげる。データを積み重ね、町に対して介護者向けの新しい支援策の提案も検討しているという。さらに、5日間の研修を受けた45人の住民を「ケアラーサポーター」として養成。町内に介護者がいつでも立ち寄れるカフェもつくった。

こうした取り組みを始めたきっかけは、10年に町内の全世帯を対象にした実態調査だった。全世帯の15%にあたる9.60世帯に介護者がいることがわかり、そのうち6割で「明日の国は、地域で介護が必要な高齢者を支える拠点について紹介します。」

◆明日の国は、地域で介護が必要な高齢者を支える拠点について紹介します。

●「まじくる かいご楽快」 1月9日午前10時～午後4時半、兵庫県西宮市六湛寺町、西宮市民会館アミティホール(阪神西宮)。午前中は生活とリハビリ研究所の三好春樹さんや、「治さなくてよい認知症」の著書がある医師の上田諭さんが講演。午後は介護家族や介護職、医師らが語り合う。参加費3千円(当日4千円)。高校・大学・専門学校生は千円。申し込みはNPO法人「つどい場さくらちゃん」へ、電話・ファクス(0798・35・0251)かメール(sakurachanmaru@bca.bai.ne.jp)で。

書店に並ぶ来年の日記が気になる季節。10年日記を始めたのは、50代半ばだった20年近く前、たまたま書店で見かけたからだった。夫が定年退職し、岡山市に移って新たな暮らしの節目に何となく買った。そして家に帰ってふと気づいた。父は50代、母と姉は60代で亡くなり、私自身も短命だと目ざらるから思っていたのだった。10年も生きられるわけがないと思った。でも気づけば10年が過ぎた。10年日記は日常のメモのように桜や紅葉の時期を振り返るのにも参考になって役立った。何より生きる自信がかった。新しいの

患者を生きる

3198

感染症

2014年5月、マダニが媒介する重症熱性血小板減少症候群(SFTS)に感染後、肺炎を併発して母(当時86)を亡くした松山市の男性(64)は6月中旬、自身も激しいだるさを覚え、松山赤十字病院を受診した。

その日は日曜日で、診察した医師は男性に糖尿病の既往があることから、入院を勧めた。翌日、男性を診察した内科部長の藤崎智明さん(52)は、SFTSに感染して

1カ月前に亡くなった女性の長男だと気づいた。

男性の血小板の数が次第に減少したことから、SFTSを疑い、保健所を通じて血液を県立衛生環境研究所へ送った。数日後に「陽性」との連絡があった。この時、すでに男性の母が亡くなってから2週間以上たった。SFTSの潜伏期間が5〜14日であることから考えると、母から男性に感染した可能性は低かった。

病院では急きょ、SFTSに関する勉強会を開いた。高い熱や倦怠感、下痢、嘔吐など、SFTSに特徴的な症状を確認した後、医

母に続き入院 死を覚悟

SFTS②

師や看護師らに二次感染を防ぐために、手袋やマスクなどの防護を徹底するよう呼びかけた。

SFTSに有効な治療法はなく、点滴などの対症療法しかない。男性はだるさに加え、嘔吐を繰り返すようになった。1カ月はご前、ぐったりする母の姿を思い出した。

「死ぬのかなあ。もう1人やけん、それもいいか」

数日後、左目に異常が現れた。「左目が、見えん」



退院後、主治医だった松山赤十字病院内科部長の藤崎智明さんと話す男性(手前)＝松山市の松山赤十字病院

な硝子体と呼ばれる部分に炎症が起きていた。因果関係ははっきりしないが、SFTSを誘発した可能性がある。眼科の医師から「硝子体」の炎症を抑える必要があると聞き、「硝子体」の炎症を抑える必要がありま